

# **出雲市埋蔵文化財調査報告書**

**第8集**

1998年3月

**出雲市教育委員会**

# **出雲市埋蔵文化財調査報告書**

**第 8 集**

1998年3月

**出雲市教育委員会**

## はじめに

出雲市は県内でも有数の埋蔵文化財の密集地であり、西谷墳墓群、今市大念寺古墳、上塩治築山古墳など、全国的に注目されている文化財が数多くあります。

これらの歴史文化遺産は、後世に引き継ぐ文化財として保存と活用を図る必要があります。

また一方では、近年の大規模開発に伴って発掘調査後に消滅する遺跡も少なくありません。それらは、発掘調査の成果を報告書として残し、後世に記録として保存し伝えなければなりません。

このたび、里方八石原遺跡と角田遺跡の2遺跡の調査結果がまとまりましたので、その成果を記録として残すとともに、今後の埋蔵文化財行政を推進するため活用していきたいと存じます。

最後に、本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心からお礼申し上げます。

平成10年（1998）3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

## 例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が発掘調査を行った高浜小学校移転改築に伴う里方八石原遺跡と、宮松地区は場整備事業に伴う角田遺跡の報告書である。

2. 発掘調査期間は次のとおりである。

里方八石原遺跡 平成4年11月24日～平成5年1月20日

角田遺跡 平成8年11月18日～平成8年12月19日

3. 発掘調査体制は次のとおりである。

里方八石原遺跡

調査主体 出雲市教育委員会

調査指導者 角田徳幸（島根県教育委員会文化課主事）

調査担当者 川上 稔（文化・スポーツ課係長）

角田遺跡

調査主体 出雲市教育委員会

調査指導者 岩橋孝典（島根県教育委員会文化課主事）

調査担当者 川上 稔（文化振興課係長）

岸 道三（文化振興課主事）

4. 本書の執筆・編集は、川上 稔、岡山 薫（出雲市教育委員会文化振興課臨時職員）が行ったが、実測については、今岡司郎、糸賀伸文の両氏、トレース等については、飯國陽子、三成留美の両氏にお世話になった。

5. 角田遺跡の発掘調査にあたっては、地元の川上智朗氏の協力を得たほか、西尾克巳（島根県教育委員会文化財課主幹）、守岡正司（島根県埋蔵文化財調査センター主事）の両氏からは有益な指導、助言をいただいた。記して謝意を表します。

6. 造構の略称記号は次のとおりである。

S D (溝状造構) S K (土坑) S X (その他の造構)

# 目 次

はじめ

例 言

目 次

## 里原八石原遺跡

1. 位置と環境 .....	1
2. 調査に至る経緯 .....	2
3. 調査の概要 .....	3
4. まとめ .....	10

図 版

## 角田遺跡

1. 位置と環境 .....	15
2. 調査に至る経緯 .....	16
3. 調査の概要 .....	19
4. まとめ .....	29

図 版

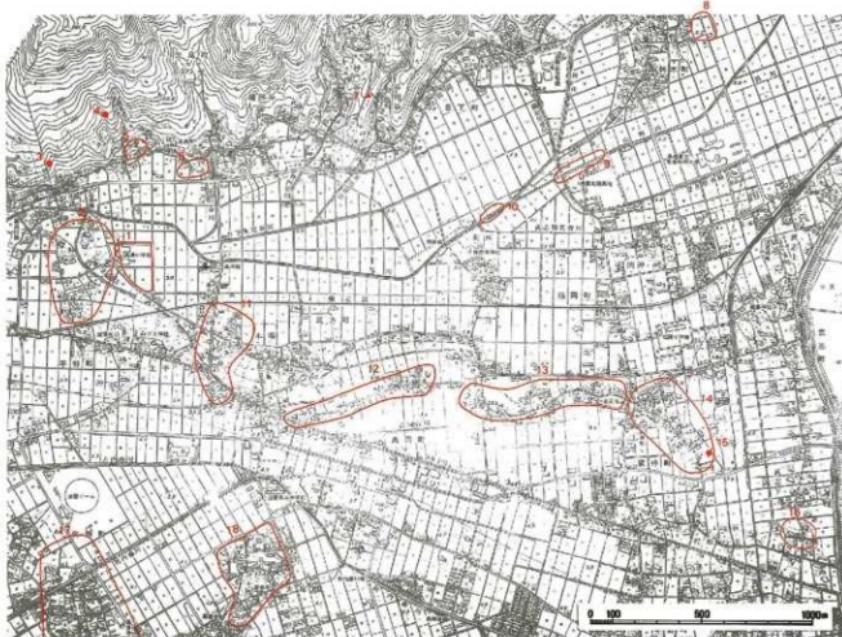
# 里方八石原遺跡

## 1. 位置と環境

これまで、出雲市北部の北山山麓付近では、埋蔵文化財の集積密度は必ずしも高くはなかったが、島根大学による微高地上での踏査や出雲市教育委員会の分布調査によって、弥生時代から中世にかけての遺跡が広く存在し、微高地のはとんどが遺跡であることが確認されている。

高浜地区においても、微高地上とその周辺には遺跡が点綴し、山持川（高浜川）沿いに東から山持川川岸遺跡、里方別所遺跡、高浜Ⅰ遺跡、高浜Ⅱ遺跡、里方八石原遺跡、高浜川遺跡など比較的大きな遺跡が存在する。また、山麓には、規模は小さいが、前口遺跡、熊見谷遺跡に遺物の散布が確認されているほか、矢尾横穴墓群、大前山古墳、石臼古墳がある。これらの遺跡のうち、発掘調査によつて遺跡の性格を少しでも知り得たのは、山持川川岸遺跡、高浜Ⅱ遺跡、里方八石原遺跡に過ぎない。

里方八石原遺跡は、斐伊川によって生成された旧自然堤防状地形の東縁辺に位置し、山麓近くを東から西に流下する山持川（高浜川）のすぐ南側にあたる。この遺跡に限ってはこの山持川（高浜川）の氾濫の影響を大きく受けている。



第1図 里方八石原遺跡周辺の遺跡

1. 里方八石原遺跡
2. 高浜Ⅱ遺跡
3. 石臼古墳
4. 大前山古墳
5. 熊見谷遺跡
6. 前口遺跡
7. 矢尾横穴墓群
8. 蘭若寺東遺跡
9. 山持川川岸遺跡
10. 里方別所遺跡
11. 高浜Ⅰ遺跡
12. 高岡遺跡
13. 稲岡遺跡
14. 萩籽Ⅱ遺跡
15. 萩籽古墳
16. 萩籽Ⅰ遺跡
17. 矢野遺跡
18. 大冢遺跡

## 2. 調査に至る経緯

高浜小学校が老朽化したため、東方200mの当該地に移転改築することになったが、埋蔵文化財を包含する可能性が高かったため、事前の確認調査をすることになり、平成4年5月18日から試掘調査に着手した。

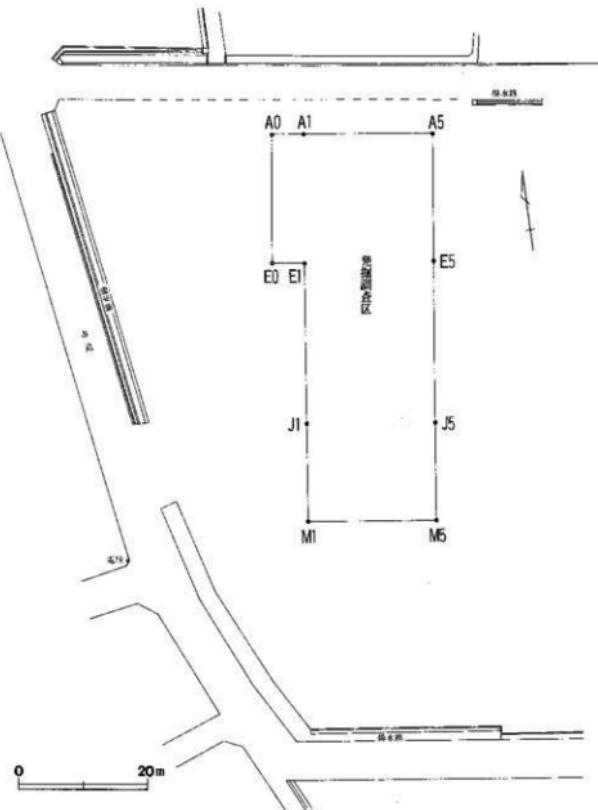
試掘調査地の地目は、西側の一部に畑はあるが、ほとんど水田である。造成地の全域にわたり2×5mの規模のトレンチを14ヶ所設定し、重機を導入して遺物や遺構の有無について慎重に調べた。その結果、遺物は西側に大きく偏って出土することが判明したため、その部分について、東西方向に50m、南北方向に80mの細長いトレンチを各1本設定し、遺物の散布範囲を限定するとともに、遺構の有無について詳しく調査を行った。調査は重機で表土を掘削したのち、作業員により遺物、遺構の検

出状況を調べたが、古い時期の遺構は検出されなかつたものの、遺物は奈良時代の須恵器を中心に出土地した。

調査によって、遺物のはとんどは、二次堆積の灰褐色砂層から出土していることから、そう遠くないところから洪水により流されてきたものであることが判明した。そして、試掘調査をほぼ終えた6月10日に、県の調査指導を受けたうえで県教委と協議を行い、遺物が密に分布していた田3筆を対象として、発掘調査することに決定した。

発掘調査は、平成4年11月24日に着手し、平成5年1月20日に終了した。

調査の結果、古い時期の遺構はなかったものの、遺物は奈良時代を中心に、須恵器コンテナ4箱、土師器コンテナ6箱のほか、砥石、土鏡、水晶などが出土した。



第2図 発掘調査区位置図

### 3. 調査の概要

発掘調査は、試掘調査によって遺物の散布が確認された田三筆を対象に平成4年11月24日に着手し、平成5年1月20日に終了した。

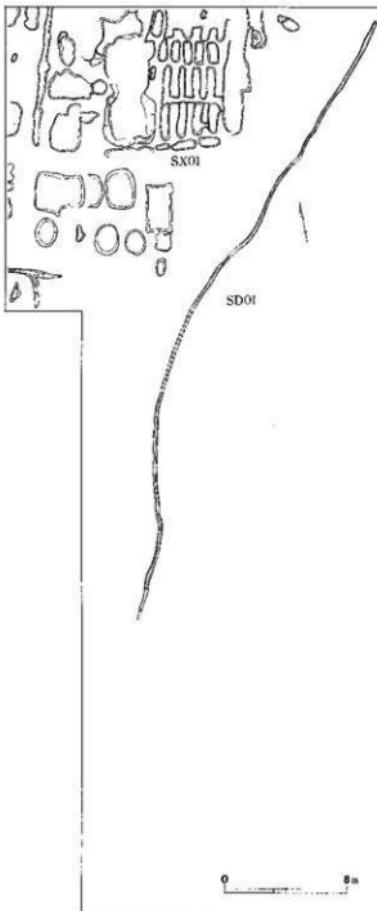
発掘調査に先立ち、遺物の包含された灰褐色砂層より上層を重機で排土ののち、 $5 \times 5\text{ m}$ のグリッドを調査区全域に設定した。グリッド杭は、南北方向にA～M、東西方向に1～5を設定し、調査区は南北60m、東西20m、の $1200\text{ m}^2$ を対象として実施した。その後、調査を進めていく過程で、調査区の北西で検出された遺構が調査区の西側に広がることが判明したため、西側に調査区を拡張して新たにA0～D0グリッドを設けた。

調査区の堆積土層は、上層から水田耕作土、灰褐色粘質土、褐色砂質土、灰褐色砂、明褐色砂、暗褐色砂、暗褐色粘質土で構成されている。厚さ10～30cmの灰褐色砂（腐蝕混じり）に奈良時代の遺物が含まれており、明褐色砂より下層からは全く遺物は確認されていない。

検出した遺構は、畝状遺構、土坑、溝状遺構であるが、いずれも近世以降の遺構で、調査区のなかでも標高がやや高い北西付近に集中し、地形的にみても旧自然堤防状地形の縁辺部にあたる。

遺物が含まれる灰褐色砂は、調査区の南半分に広く堆積し、北側では中央部分以外にはあまり見られない。

出土遺物は、奈良時代を中心とする土器類がほとんどであるが、そのほかには、土製支脚、竈、砥石、土錘、水晶などがある。須恵器はこわれにくいとはいえ、大きな破片も多く、ほぼ完形のものも2点あることから、そう遠くないところから洪水により運ばれてきたと考えられる。



第3図 遺構配置図

## 遺構と遺物

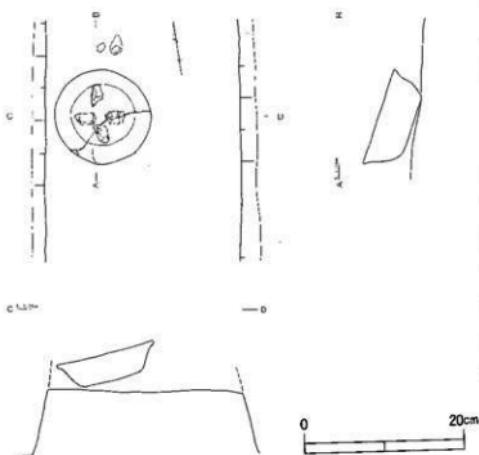
発掘調査によって検出した遺構は、畝状遺構、土坑、溝状遺構がある。畝状遺構、土坑は、調査区のなかでもやや標高の高い北西隅の旧自然堤防状地形上にある。溝状遺構は、調査区を北東から斜めに横切るように伸びている。

畝状遺構 (SX01) は、A 2、B 2 グリッドの南北10m、東西5mの範囲で検出している。幅0.6m、長さ1.4m～2.4mの溝が規則的に配置され、南北に細長い溝が4列あり、南端の溝は東西に細長く掘られている。畝部よりも20～30cm深く、明褐色砂に掘り込んでいる。この溝内には、土地改良前の旧水田耕土と考えられる灰褐色粘質土が入っていた。遺物としては、陶磁器片が微量あったのみであるが、おそらく明治期以降の畝状遺構と考えられる。

また、畝状遺構のまわりからは、土坑が大小10数個検出されている。大きなものでは、長さ3mの方形の土坑があるほか、長さが1mのものもあるが、規則性に欠け、遺構の性格は不明である。それらは、坑内に堆積した土が灰褐色粘質土であったことからみて、一部切り合い関係はあるものの、ほぼ畝状遺構と同時期であると考えられる。

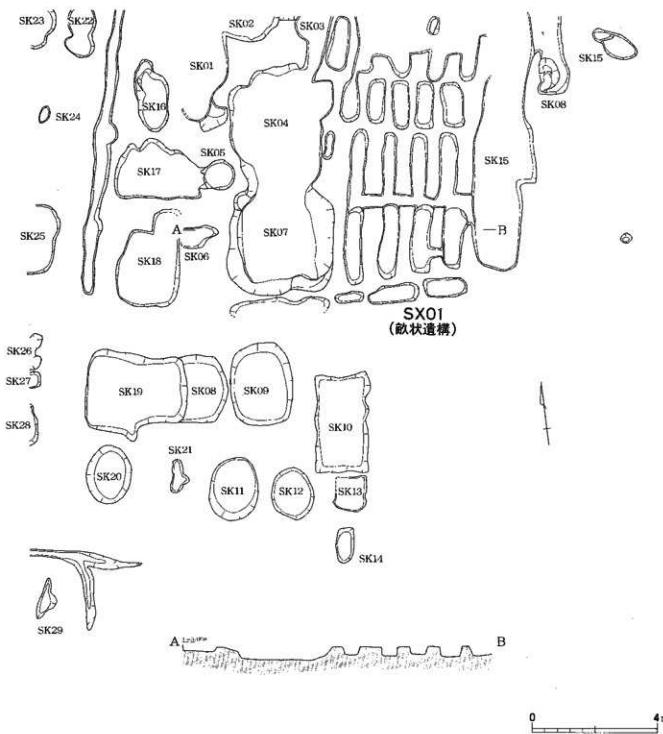
溝状遺構 (SD01) は、調査区を斜めに横切るように、北東隅のA 5付近からJ 1付近まで長さ約45mにわたって伸びている。北端は調査区外に伸びているため不明であるが、南端は上層により削られていると考えられ、確認できなかった。溝は幅20cm、深さ10cm程度の小規模なもので、E 3付近までは直線的だが、それから南は緩く曲がっている。この溝からは明確な遺物は出土していないが、灰褐色粘質土が堆積していることから、ほぼ畝状遺構と同時期であると考えられる。

遺構としては、これら新しい時期のものばかりであり、遺物のほとんどが洪水で運ばれてきた二次堆積のものであったが、例外と思われるものもあった。畝状遺構の下層から出土した土師器がそれで、



第4図 水晶出土図

壺の中には長さ2～3cmの小さな水晶片3点と淬片1点があったほか、すぐ傍らからも淬片2点が出土している。さらに、この上には、あたかも蓋をするようにして、須恵器の壺が破碎してふせられていた。その出土状態からみて二次堆積とは考えられず、調査区北西付近には、古い遺物はほとんど確認できなかったものの、旧自然堤防状地形の一部とみられることからみて、この西側には古代の集落がある可能性が推定できる。



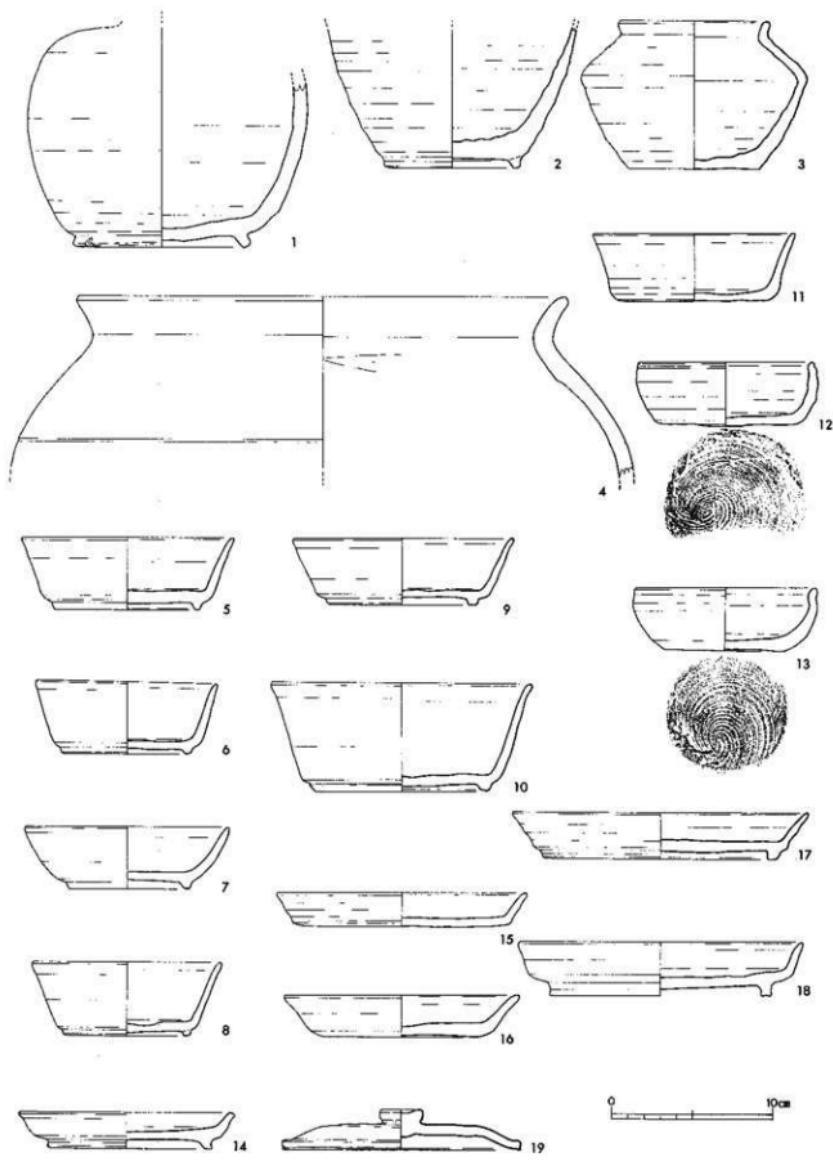
第5図 欽状遺構等実測図

## 遺構に伴わない遺物（第6図・第7図）

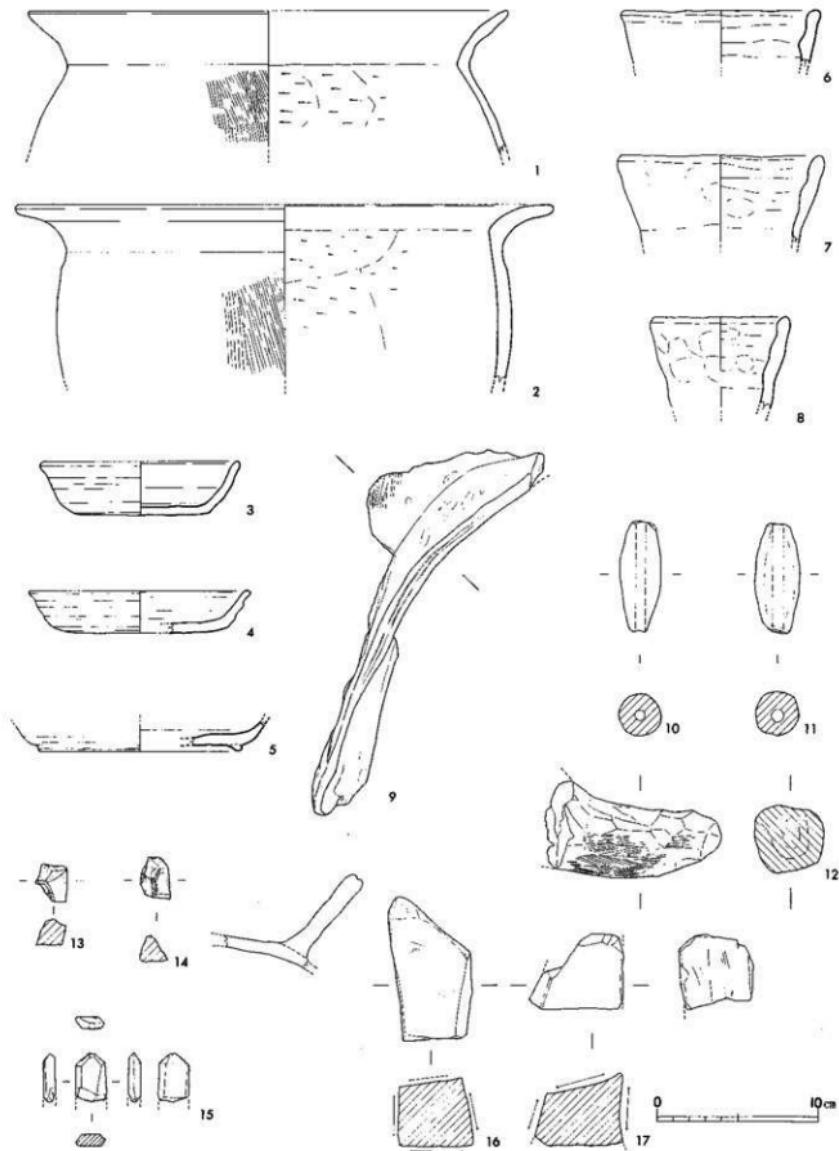
その他の遺物として、須恵器や土師器の他、土製品や石製品などがある。

第6図は須恵器である。1・2は低脚高台付の壺で、1は底径11.0cm、胴部最大径17.3cmを測る。体部は内外ともヨコナデ調整で、高台の一部に幅5mmのキザミ目を入れる。2は底径8.4cmを測り、底部は回転糸切り後ナデ調整を施す。体部にはロクロ成形時のナデ痕が残る。3は無高台の短頸壺で、胴部中央がそろばん形に張り出し、口縁端部を丸くおさめる。底部は回転糸切り後未調整である。4は口径30cmの甕で、内面には円形当て具、外面には平行タタキ目の板で成形された痕が残る。また、肩部に幅2mmの沈線が入る。5～9は底径7.5～9.3cm、器高3.9～4.6cmを測る低い貼付高台をもつ壺である。5・8・9の体部はやや外反気味に立ち上がって口縁に至る。6は逆八の字状に直線的に立ち上がる体部で、7はやや内湾する体部をもつ。底部の切り離しはいずれも回転糸切り後未調整である。6の高台端部にはわずかな凹みが認められる。10は低い貼付高台をもつやや大きめの甕である。高台端部がわずかに凹み、底部は回転糸切り後ナデ調整を施す。11～13は無高台の壺で、口径に対して器高がやや低い。平底で体部がやや外反気味に立ち上がるものの(11)、丸みをおびるもの(12)、丸みをおびて立ち上がり、口縁がくびれるもの(13)がある。いずれも底部は回転糸切り後未調整である。14・16は口径13.4～14.6cm、底径9.5～10.0cmを測る皿で、14は外反する低い貼付高台をもち、体部はやや外反気味に立ち上がる。口縁端部はやや下がり気味の平坦面をなし、口径に対し器高が低い特徴をもつ。底部は回転糸切り後未調整。16は平底だが、底面中央がやや立ち上がり、体部はやや外反する。15も平底の皿だが、逆八の字状に直線的に立ち上がる体部で、底部は回転糸切り後ナデ調整を施す。17・18は低い貼付高台の甕で、18の高台端部にはわずかな凹みが認められる。体部はやや外反気味に立ち上がり、内外ともヨコナデ調整を施す。17にはロクロ成形時の指当の痕が残る。19は擬宝珠状つまみの付く蓋である。天井部は平坦で口縁端付近で小さく屈曲し、縁辺部に幅1mm弱の浅い沈線が入る。天井部の切り離しははっきりしないが、全面回転ナデ調整を施す。柳浦編年のIII b類に属すると思われる。

第7図は土師器（1～8）、土製品（9～12）、石製品（13～17）である。1・2は甕の口縁から肩部の破片で、口縁は「く」の字状に屈曲する。外面はタテ方向のハケ目、内面はヨコ方向のケズリを施す。1の器壁はやや薄く、外面にススの付着が少し見られる。3・4は平底の壺で、体部は逆八の字状に立ち上がる。4は口縁端に平坦面を作る。底部の切り離し法はともに不明だが、ヘラ状工具で平らにした痕がわずかに認められる。5は低く小さな貼付高台をもつ壺の底部破片である。3～5の壺は内外面に赤色顔料による塗彩が施されている。6～8は製塩土器の破片である。6は口径12.0cmで成形時の凹凸が認められる。7は口径12.4cm、8は8.2cmを測る。ともに内外面に手づくね成形時の指頭圧痕が認められる。内面に布目痕を見ないが、形態としては六連式系統の焼塩土器と考えられる。9は甕の底部で、先端部に一条の沈線を施す。10・11は長さ7.0cm、孔径0.6～0.7cmの管状紡錘形の土錐である。重さは10が42g、11が48gを計る。12は土製支脚の突起部で、ナデやハケ目痕が残り、ススの付着が見られる。13～15は土師器の壺（7～3）の中にあった水晶である。15は一部欠損しているが、上質の結晶体を利用し、7mmの厚さに成形している。13・14は未加工品と思われる。16はきめの細かい砥石で、4面を使用し、重さ300gを計る。17も砥石である。一部欠損しているが、重さ125gを計る。3面を使用し、タテ方向の使用痕が認められる。



第6図 その他の遺物実測図(1)



第7図 その他の遺物実測図(2)

## 4. まとめ

発掘調査によって検出した遺構は、明治期以降のものと考えられ、古い時期の以降は検出できなかつたが、二次堆積とはいえ奈良時代の須恵器、土師器などが数多く出土した。それらの中には、大きな破片やほぼ完形に近いものもあり、調査地からそう遠くない位置に、奈良時代の集落が存在することが確認できたことは大きな成果といえる。おそらく、高浜川によって東から運ばれたと考えられるが、近隣には奈良時代の集落はこれまで確認されていないので、今後の課題となろう。また、調査地の西側にも古代集落が予測され、調査地付近の旧自然堤防状地形の微高地は奈良時代にはかなり居住地域になっていたと考えられる。この付近は、西流する出雲大川（現在の斐伊川）の北岸にあたり、『出雲國風土記』の「河の両邊は、或るは土地豊かに沃えて……百姓の膏腴の蘭なり。……五つの郡の百姓、河に便りて居めり。」という記載を裏付けている。

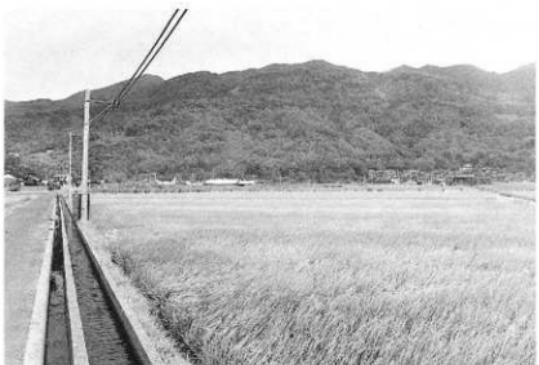
また、遺物のなかで特異なものとして、土師器に入れられた水晶がある。畝状遺構の下層から出土したもので、畝状遺構により周りが掘削されており遺構に伴うものかどうか判断し難い。土器の中に加工した玉を収納した祭祀は全国的に認められるようであるが、今回の例は製品ではないことから、何らかの意図により土器に水晶を入れていたと考える方が妥当であろう。津片もあることなど類例がなく、使途については現時点では不明である。

また、調査半ばの12月12日には、身近な遺跡に親しみ、地域の歴史に触れてもらうため、ふるさと文化庁主催の「親子体験発掘」を実施し、60人あまりが発掘作業を体験した。



体験発掘（平成4年12月15日 出雲新聞）

# 図 版



里方八石原遺跡近景（調査前）



調査区全景（南から）



鉄状遺構等（西から）

図版 2



歓状遺構（南から）



溝状遺構（南西から）



遺物出土状況

図版 3



6-1



6-2



6-3



6-4



6-5



6-6



6-7



6-8



6-9



6-10



6-11



6-12



6-13



6-14



6-15



6-16



6-17



6-18



6-19

図版 4



7-1



7-3



7-5



7-2



7-4



7-12



7-9



7-6



7-8



7-7



7-10



7-11



7-16



7-17



7-13

7-14

7-15

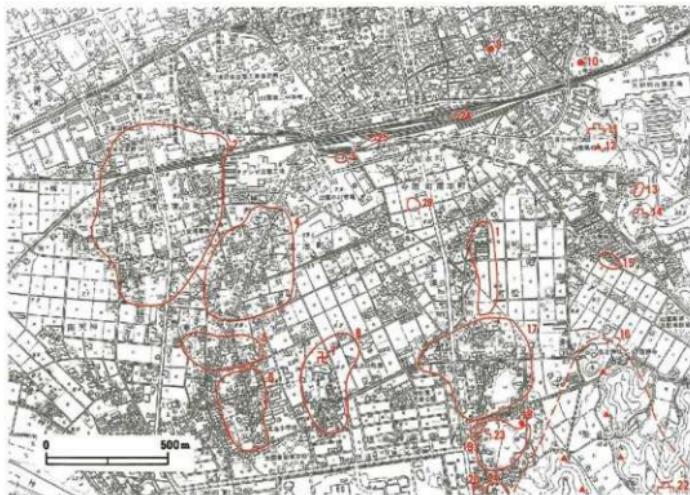
# 角田遺跡

## 1. 位置と環境

角田遺跡は、出雲平野のはば中央部、山廻丘陵の西方に所在する。付近はこれまで田園の広がる地域であったが、JR出雲市駅の南わずか500mということもあり、近年JR出雲市駅の高架化に伴う駅南地区区画整理事業により日々変貌しつつある。

遺跡の現況は、宅地と水田であるが、南北約400m、東西約100mの南北に細長い範囲に遺物の散布が確認されている。遺跡の基盤は、おそらく戸川の旧自然堤防状地形の微高地と考えられ、付近からは藤ヶ森I遺跡、藤ヶ森II遺跡、藤ヶ森南遺跡など、立地を同じくする遺跡が近年開発によって相次いで発見されており、今後も平野下の埋没した戸川の旧自然堤防状地形に集落を構えた新遺跡が発見される可能性が高い地域である。

角田遺跡の南には、大集落遺跡とみられる宮松遺跡のか、国指定史跡の上塩治築山古墳、上塩治地蔵山古墳など島根県を代表する古墳時代後期の横穴式石室墳があり、この地域は主に古墳時代になってから集落が形成され、大きな経済力を基盤とした政治勢力の台頭がみられる。さらに、すぐ西方には天神遺跡、高西遺跡など弥生時代の拠点集落が営まれており、天神遺跡は奈良時代の神門郡家の比定地でもある。



第1図 角田遺跡周辺の遺跡

1. 角田遺跡
2. 天神遺跡
3. 善行寺遺跡
4. 高西遺跡
5. 弓原遺跡
6. 塩治小学校付近遺跡
7. 神門寺境内庭寺
8. 神門寺付近遺跡
9. 崇山古墳
10. 今市大念寺古墳
11. 平家丸城跡
12. 久敵圓墳古墓
13. 下沢遺跡
14. 向山城跡
15. 下沢食館周辺遺跡
16. 上塩治横穴墓群
17. 宮松遺跡
18. 上塩治築山古墳
19. 築山遺跡
20. 寿昌寺西遺跡
21. 寿昌寺遺跡
22. 大井谷試跡
23. 伝塩治氏館跡
24. 藤ヶ森I遺跡
25. 藤ヶ森II遺跡
26. 藤ヶ森南遺跡

## 2. 調査に至る経緯

角田遺跡は、昭和45年秋の出雲高校生による調査によってはじめて遺跡の概要が明らかになった遺跡で、水路沿いの南北200m以上にわたって遺物が散布し、調査箇所からは古墳時代後期の土師器や須恵器が比較的良い保存状態で出土している。

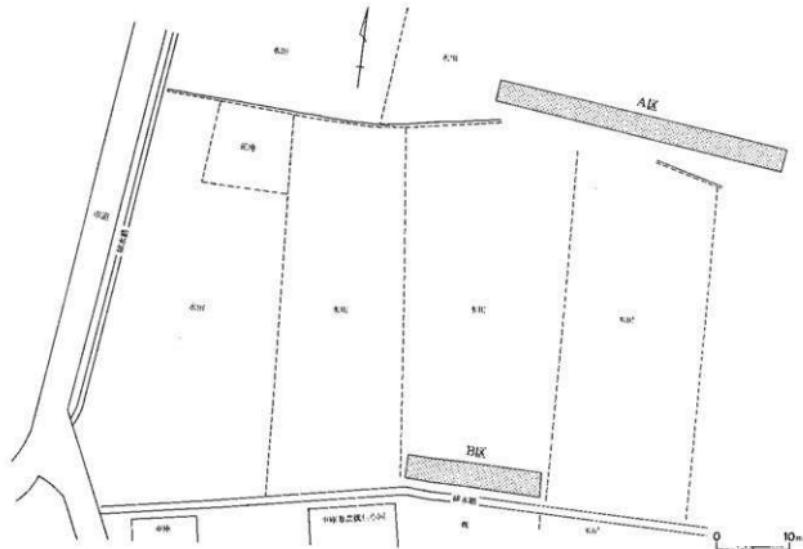
今回の発掘調査は、宮松地区の10人で共同実施するは塙整備事業が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にかかるため、道路部分について平成8年（1996）10月7日に試掘調査を実施した。

試掘調査は、7カ所にトレンチを設定し、重機で徐々に掘削しながら慎重に遺構、遺物の有無について調べた。

調査の結果、中央部の第6トレンチと集落寄りの第8トレンチの2ヶ所から遺構、遺物が多く出土したが、その他のトレンチからは全く検出しなかった。調査後、島根県教育委員会、施行代表者と協議し、道路予定地以外については盛土に留めることを条件に、道路部分のこの両トレンチを中心にして、発掘調査を実施することに決定した。

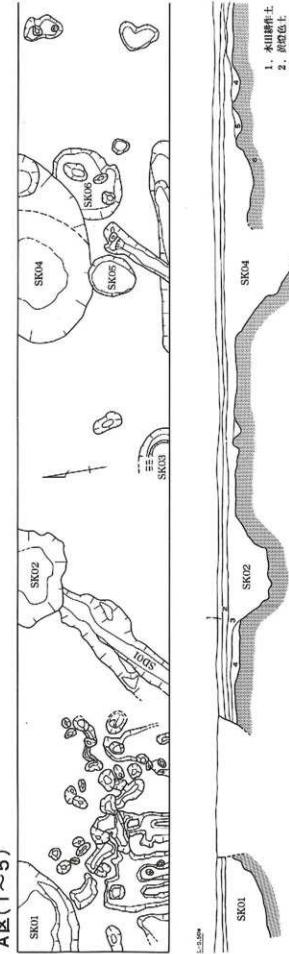
調査範囲は、第6トレンチ付近をA区、第8トレンチ付近をB区として、それぞれ3×40m、3×20mの東西に長いトレンチを設定した。

調査は、平成8年（1996）11月18日に着手し、同12月19日までの約1ヵ月を行い、奈良時代以降の溝状遺構、土坑など多くの遺構や遺物が出土した。

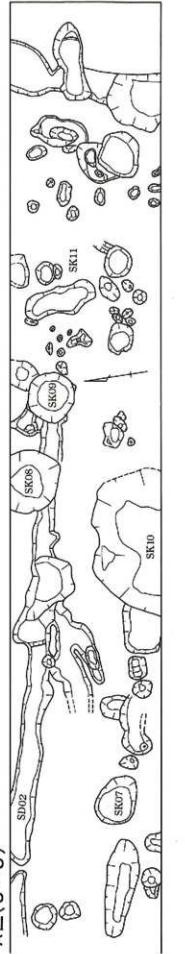


第2図 発掘調査区位置図

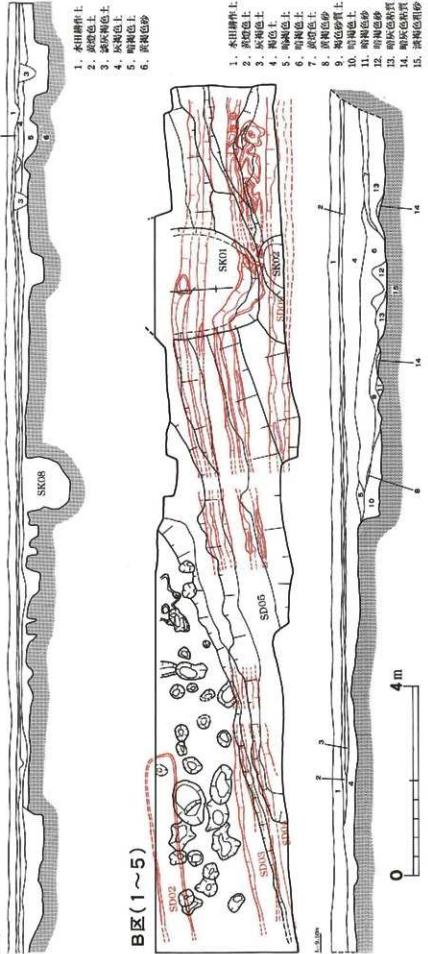
A区(1~5)



A区(5~9)



B区(1~5)



1. 水田耕作土
2. 黑褐色土
3. 浅褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土

1. 水田耕作土
2. 黑褐色土
3. 浅褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土

第3図 連続断面図

### 3. 調査の概要

角田遺跡については、昭和45年秋の調査によってはじめて遺跡の一端が明らかになった。その時には、土地改良（出雲市土地改良区掲松第3工区）に伴う水路を集落東側の水田地帯との間に掘削した際、沿川に須恵器や土師器が広く散布していることがわかり、緊急に出雲高校生らにより分布調査（一部は発掘調査）がなされている。その調査結果については出雲市埋蔵文化財調査報告書第5集（出雲市教育委員会 1995年）に報告されているので詳細はそれに譲るが、水路部分の南北200mにわたって遺物の散布が確認されている。

調査は11月18日から同20日までの3日間にわたって実施され、遺物が集中していたA区では、土師器の壺3個体、須恵器の直口壺、壺蓋など残存状態の良い遺物が墓壙の上面に置かれた状態で発見されている。また、B区では、高壺などの破片が確認され、遺跡がかなり広範囲に広がることがわかっている。

今回の調査地点はその南側に隣接する地域であるが、地形的にみて南に広がる大規模遺跡である宮松遺跡が畑に立地する点から角田遺跡とは異なる遺跡と理解し、調査地については角田遺跡に含まれるものと判断した。

発掘調査は、試掘調査によって遺構、遺物が検出された区域2ヵ所について、トレンチ状に調査区を設定して実施した。北側の規模の大きな方をA区（3×40m）、南側をB区（3×20m）とし、調査を並行して行った。

A区では、トレンチ全面に遺構が検出された。時代的には奈良時代から近世に至るが、新しい時期が中心で、数多くの土坑と溝状遺構が検出されている。遺物としては、吹子の羽口や鉄滓などの鍛冶工房に関わるもの、古瓦などの特異な遺物も出土している。

溝状遺構としては、SD02が比較的の規模が大きく、A4グリッドからA7グリッドまでの1.2mで確認しているが、中世の遺構である。

上坑では、SK01は、一部しか検出していないが径約3mの近世の石組井戸と考えられ、石敷からは主として肥前系の陶磁器が出土している。SK08、SK09からは、吹子の羽口や鉄滓が多く出土しており、近くに鍛冶工房などの存在を窺わせる。SK10は石組井戸であるが、かなり形が崩れている。

B区の調査面積はA区の半分であるが、遺構は時代的に複合してトレンチ全体から検出している。すぐ南の宮松遺跡に接しているためか、奈良時代の遺物が多い。遺構としては古代から近世までの多くの溝状遺構のほか、奈良時代の木組井戸が検出されている。

溝状遺構では、遺構の規模、遺物量の点で、SD05が群を抜いている。上幅3m、深さが1mもあり、ほぼ東西方向に伸びている。水が流れた形跡があるが、中からは須恵器長頸壺のようなほぼ完形の遺物をはじめ、奈良時代の土器が出土しているほか、用途不明の木製品が確認されている。

土坑では、SK01から奈良時代の木組井戸が検出されている。径約2mの十坑内に、1.2×0.7mの木組の井戸を設けている。かなり残存状態は悪かったが、下底からは曲物の一部も発見されている。

## 遺構と遺物

### A 区

調査した2本のトレンチのうち、北側の長いトレンチをA区と命名した。幅3m、長さ40mで、調査面積は120m<sup>2</sup>である。

堆積土は、上層より水田耕土、黄燈色土、灰褐色土、暗褐色土、暗褐色土があり、地山の黄褐色粗砂となる。奈良時代から近世の遺物が出土するほか、遺構としては溝状遺構のほか、数多くの土坑が検出されている。SK01、SK10のような石組井戸がみられたほか、SK08、SK09の坑内やその付近からは吹子の羽口や鉄滓など鉄生産に関連する遺物が多く包含されていた。

また、古瓦片が3点出土しており、古文献の記載はないものの、古代寺院が存在した可能性も窺われるなど貴重な成果が得られている。

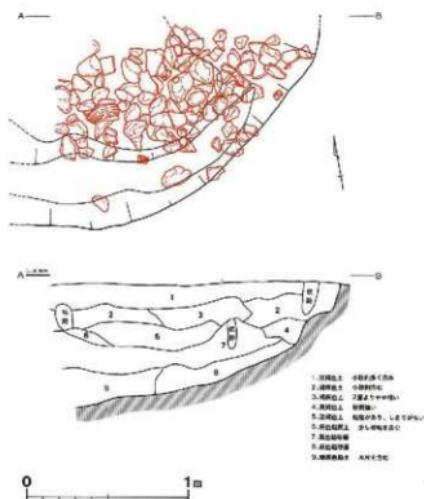
主な遺構と出土遺物は次のとおりである。

#### SD02

A4グリッドからA7グリッドまで12mを検出した溝状遺構である。中世のすり鉢や土師器が少量出土している。SK08、SK09よりも新しい時期で、土層からみると、SD01よりも新しい時期の遺構である。

#### SK01

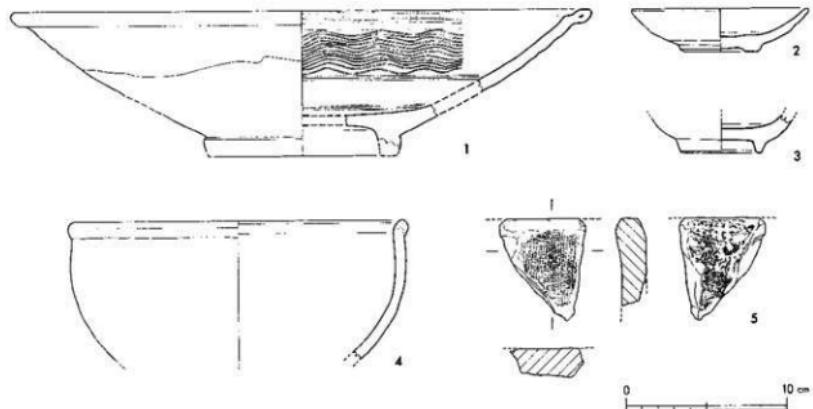
調査区の西端のA1グリッドで検出した土坑である。調査区外にかかっているが、検出した範囲では東西1.5m、南北1.2m、深さ0.8mであり、実際は径3m近い規模を有すると推測される。土坑の



第4図 SK01 (A区) 遺構実測図

中層から下層にかけて拳大から人頭大の自然石を敷きつめており、近世初頭の石組井戸と考えられる。石敷付近からは陶磁器などが出土している。

出土遺物としては、近世の陶磁器のほか古瓦片も1点出土している。このうち古瓦は混入遺物である。浅鉢(5-1)は、口径36cm、器高9cmの肥前系の三彩陶器で、内面のみに施釉、施文しており、高台が付く。皿(5-2)は、口径11cm、器高2.7cmの肥前系陶器で、器の内外面には灰白色の施釉がなされている。碗(5-3)は、底部片であるが、高台の底径5cmを測る伊万里の磁器である。深鉢(5-4)は口縁が玉縁の近世陶器と考えられるものであるが、不明である。



第5図 SK01 (A区) 出土遺物実測図

#### SK08

トレソチ中央部のA 6 グリッドからは、鍛冶に関連した遺物が出土している。SK08は径1.3m、深さ0.7m以上の土坑で、坑内からは吹子の羽口のほか鉄滓1点が出土している。調査区内には明確な鍛冶工房らしき遺構は見当たらなかったが、トレソチの北側にある可能性もある。出土遺物として、吹子の羽口（7-2）がある。外径8.5cm（推定）、送風部内径2.5cm（推定）を測る。なお、吹子の羽口は、A 2 グリッドのSD01とA 8 グリッドのSK16からも1点出土しているほか、鉄滓はSK09、SK16からも認められている。

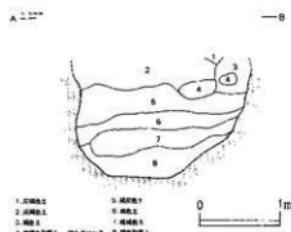
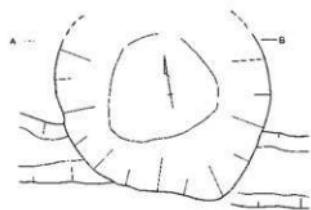
また、混入遺物として、上層から古瓦（7-1）が出土している。灰色を呈した丸瓦片で、凹面には布目痕が付着している。

#### SK09

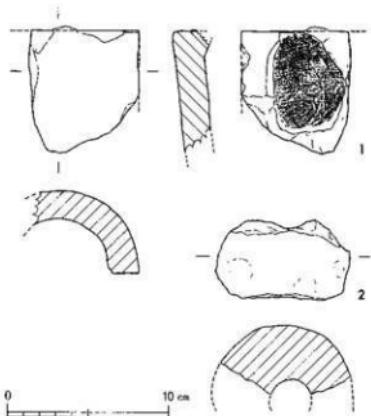
SK08の1m東に隣接する径1.4m、深さ1mの土坑で、規模はSK08よりもやや小さい。坑内からは、吹子の羽口は出土しなかったものの、須恵器などとともに鉄滓7点が確認されており、SK08の出土遺物と通じるものがある。

#### SK10

SK08のすぐ南側で検出した土坑である。径3.2m以上の大きなもので、南半分は調査区外である。石組の井戸と考えられ、中層から下に人頭大の石が多くあるが、か



第6図 SK08 (A区) 遺構実測図



第7図 SK08 (A区) 出土遺物実測図

る。切り離しは回転糸切りで、未調整である。胎土は密で、体部の調整は内外ともヨコナデし、1と同様に、逆八の字状に立ち上がる。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。3は須恵器の鉢と思われるものの底部である。底径15.5cmを測り、平坦な底面をなし、砂粒の動きが同心円状に若干認められるが、切り離し法は不明である。胎土はやや粗く、2mm～4mmの砂粒子を少し含む。焼成はやや甘く、灰褐色を呈す。9は砥石である。両端が折れて欠損しているため、本来の長さは不明だが、幅4.3cm、厚さ2.2cmを測り、重さは120gである。2面を使用し、タテ方向の使用痕が認められる。

4は須恵器の高杯の接合部である。二方に深さ約3mm、長さ約4cmの切れ込みを入れ、下に幅2mmの浅い2条の沈線を施す。5は須恵器の無高台杯の破片である。底部の一部と口縁部を欠く。底径は推定で8.0cmを測り、底部は回転糸切り後未調整である。体部には、ロクロ成形時に出来たと思われるヨコ方向のナデ痕が残っている。焼成は良好で青灰色を呈す。6は青磁器の底部で、削り出しの高台をもつ。体部はゆるやかな曲面をもって立ち上がっていく。内外面には、内側中心部と底面～高台内側を除いて、厚さ約0.5mmの灰緑色の釉薬がかけられ、細かな嵌入が認められる。ただし、釉の色調がくすんだ色であることや、胎土が陶器の土に近いことなどから、国産品と思われる。時期は17Cと考えられる。

7は平瓦である。破片であるが、厚さ1.8～2.0cmを測り、重さは370gである。凹面には成形型の細かな布目压痕が認められ、凸面にはやや大きめの方形格子状のタタキ目痕を残す。タタキはやや深い（深さ約1.5mm）。胎土は1mm以下の砂粒子を少し含むが、焼成は良好で、凹面は灰褐色、凸面は淡黄褐色を呈す。一枚作りと思われ、先端部をヘラで削り、その面に幅2mmの一条の浅い沈線が入っている。A区では、瓦がこの7の他に、SK01(5-5)とSK08(7-1)の3点が出土しており、本遺跡の性格を特徴づけるもの一つである。

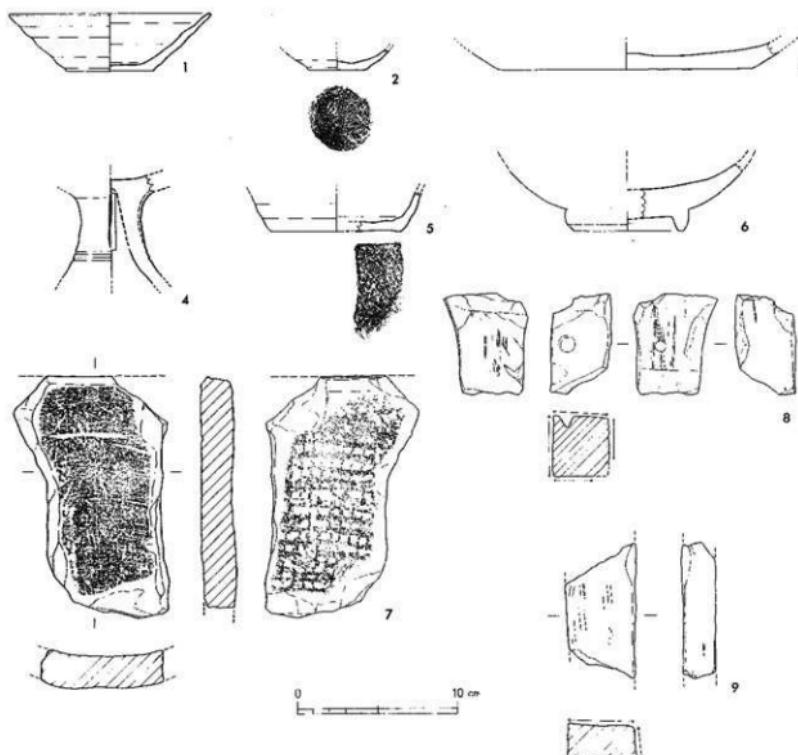
なり井戸としての形状は崩れている。石のなかには、丸く加工したうえに両面を凹状にくりぬいたものがあるほか、遺構の底部からは杭状の木製品も出土している。

#### A区その他の出土遺物（第8図）

その他の遺物として、主に包含層中のものと、SK10のものが挙げられる。

SK10の遺物として1～3、9の4点がある。1は口径12.4cm、底径5.4cm、器高3.6cmを測る、小形の土師器の無高台杯である。体部から口縁部まで直線的に逆八の字状に立ち上がる。胎土は密で、内外ともにヨコナデ調整を施す。底部は回転糸切り離し後、未調整である。器高にくらべて底径がやや小さい特徴をもつ。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。2は土師器で、底径3.8cmを測る小形の無高台杯である。

8は砥石である。欠損しているため、本来の大きさはわからないが、重さ140gを計る。4面を使用しており、タテ方向の使用痕が認められる。一面には、鋭い刃のようなものを研いだ深い（幅1.5mm、深さ0.5mm）使用痕があり、またもう一面には、円錐形に掘られた凹みがある。この穴の径は1.1cm×1.0cmのほぼ円形を成し、深さは0.7cmを測る。小さな段を作って、中心部へ向かうタテ方向の使用痕も認められる。おそらくは、回転させながら先を尖らすためにできた凹みと思われるが、何を研いだかは不明である。



第8図 A区 その他の出土遺物実測図

## B 区

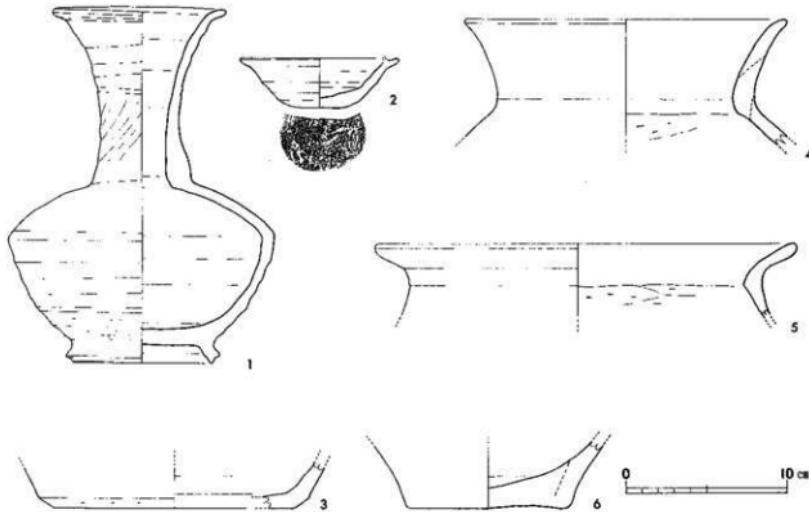
調査した2本のトレンチのうち、南側の集落に近いトレンチをB区とした。幅3m、長さ20mで、調査面積はA区の半分の60m<sup>2</sup>である。

堆積土は、基本的には上層より水田耕土、黄褐色土、灰褐色土、暗褐色土で、地山の黄褐色砂となる。A区とはほぼ同じだが、暗褐色土はやや明るい色調で、部分的にはかなり固く締まっている。また、溝状遺構も古いものから新しい時期まで複合しているため、かなり土層的には細分化している。

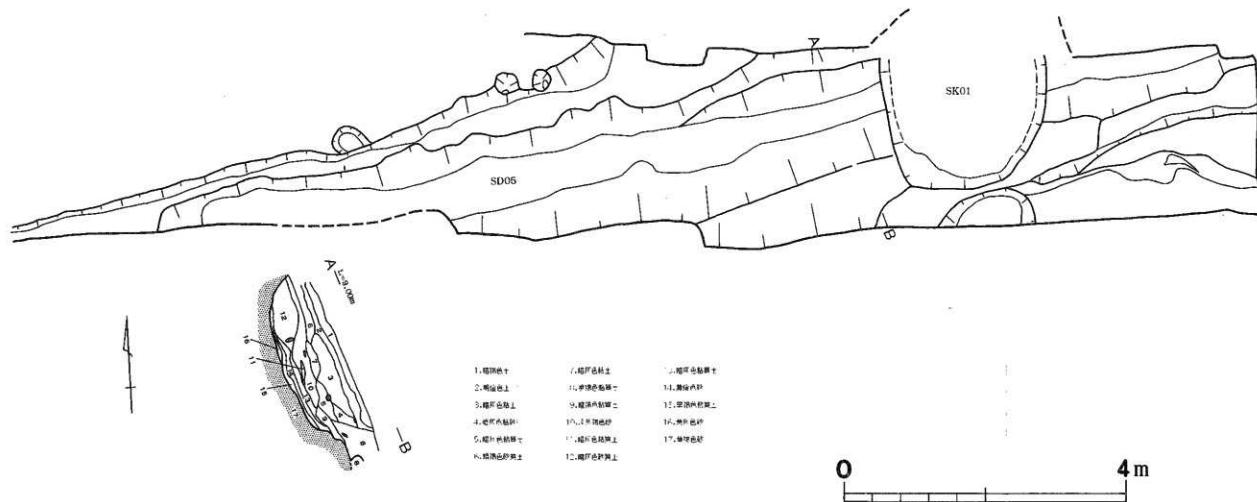
遺構としては、9条の溝状遺構のほか、土坑が検出されている。溝状遺構は、規模の小さなものがほとんどであるが、SD05のような上幅が3m近いものもある。時代的にみても、明治期以降のもの、中近世のもの、古代のものなど複数しているが、古代の溝状遺構にみるべきものがある。また、土坑のうち、SK01は、細長い板状のものを立てて囲った井戸で、奈良時代の遺構と考えられる。

遺物では、遺構に伴うものとしては奈良時代以降の遺物がある。しかし、僅かながら弥生時代の遺物も出土しているので、周辺に弥生集落がある可能性もある。A区では比較的中近世の遺物が目に付いたが、B区では奈良時代の遺物が多く、この点はすぐ南の宮松遺跡とよく似ている。遺物は細片が多いが、SD05から出土した須恵器長頸壺（9-1）のようなほぼ完形のものも出土している。また、SD05からは、長さが2mもある用途不明の木製品も出土している。

主な遺構と出土遺物は次のとおりである。



第9図 SD05（B区）出土遺物実測図



第10图 SD05 (B区) 遗构实测图

### SD01

図示していないが、上幅0.5m、深さ0.3mの溝状遺構である。水田耕土のすぐ下層で、遺構に伴う遺物はないが、B区の中でも最も新しい明治期以降の遺構である。

### SD03

SD04と並行に伸びる溝状遺構である。上幅0.5m、深さ0.2mで、北側が2段になっている。溝内は灰褐色土が入っており、SD04とともに中世の遺構である。溝状遺構の中ではSD05に次いで出土遺物が多く、土師器や砥石などがあるが、混入遺物として弥生時代の凹石がある。

### SD05

溝状遺構の中では最も規模が大きく、出土遺物も最も多い。トレンチの走向とほぼ同じ東西方向に伸びる上幅約3m、深さ約1mの溝状遺構で、トレンチ全体で検出し、調査区外に伸びる大規模な遺構である。A3付近での土層断面の観察から、少なくとも2時期が窺えるが、遺物の出土状態からは時期差は大きくなく、ともに奈良時代の遺構である。また、砂と粘土が互層になっていることから、水が流れていたと考えられる。

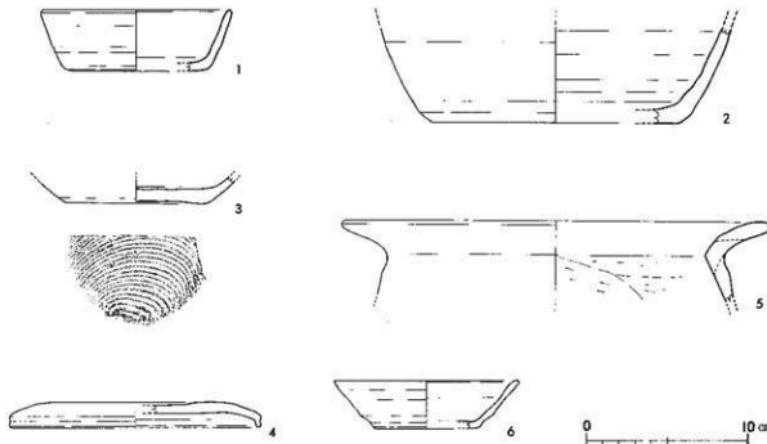
出土遺物としては、奈良時代の土器、木製品のほか、混入遺物として弥生土器も僅かにある。

### SK01

A3グリッドで検出された木組の井戸であり、南北2.6m（推定）、東西2.2mの土坑内に、南北1.2m、東西0.7mの矩形に細長い板木を直接砂に立てて囲い、井戸としている。かなり倒れた状態で検



第11図 SK01 (B区) 遺構実測図

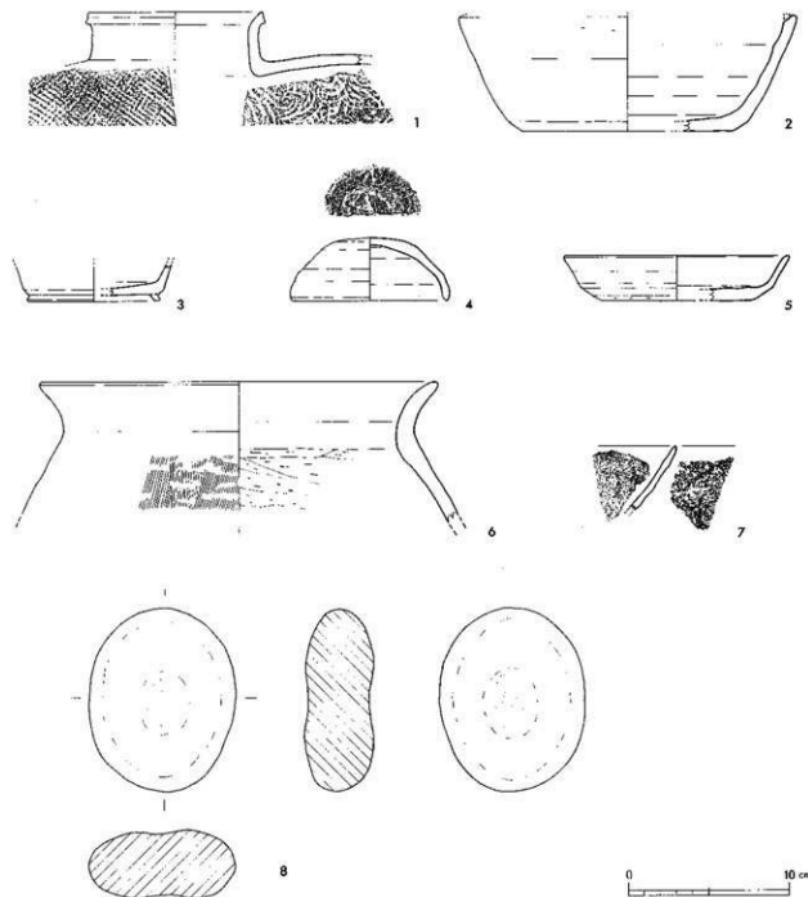


第12図 SK01 (B区) 出土遺物実測図

出し残存状態は良くないが、中からは奈良時代の土器のほか、曲物の底部も出土している。

#### B区その他の出土遺物（第13図）

1は須恵器の横瓶である。口縁から肩部にかけての破片で、口径は推定で10.8cmを測る。口縁端部は薄手の2重口縁をなし、頸部はやや短い。肩部外面には格子目のタキ痕、内面には同心円状の当て具による痕が残る。2は須恵器の大形の壺である。無高台で、体部はやや外傾して立ち上がる。底径12.8cm、器高7.2cm、口径20.8cmを測る。口縁端部の内面を欠損している。口縁から体部にかけては内外ともヨコナデ調整、体部下端と底部はヘラ削り後ナデ調整した痕が認められる。3は須恵器の



第13図 B区 その他の出土遺物実測図

低脚高台杯で、この種の杯は本遺跡では、この1点のみである。底径は推定8.0cmを測る。底部は回転糸切り後ナデ調整。体部内外面ともナデ調整を施す。焼成はやや甘く、淡い灰色を呈す。4は口径9.6cm、器高3.9cmを測る小型の須恵器の蓋である。天井部はヘラ削りのままで、内外面とも口縁部までヨコナデ調整を施す。口縁端部はやや丸みをおびて少し肥厚する。大谷編年のA8型に相当する。5は土師器の無高台杯である。口径13.8cm、底径9.2cm、器高2.8cmを測る。口径に対して器高が低く、底部の調整は回転糸切り後ナデ、体部は内外面ともヨコナデ調整を施す。内外全面に赤色塗彩が施されている。6は土師器の甕である。肩部下半を欠損しており、口径24.4cmを測る。口縁は「く」の字状に屈曲し広がり、端部を丸くおさめる。調整はヨコナデである。肩部外面には、タテ方向の12~15条の細かなハケ目、内面の頸部以下は、ヨコ方向のケズリ調整を施す。胎土には1mm大の砂粒を多く含み、焼成は普通で、淡黄褐色を呈す。7は製塙土器の破片である。微細な陶土を使用し、厚さ3~4mmの薄作りのもので、口縁端が尖っている。内面はナデ調整、外面には成形時の指頭圧痕が認められる。形態ははっきりしないが、鹿藏山式の可能性が考えられる。8は弥生時代の凹み石である。硬質の石材を用い長径11.4cm、短径9.0cmの楕円形で、厚さは4.2cm、重さは695gである。表裏の中央部がほぼ同程度に楕円状にくぼみ（深さ約3mm）、中に小さな打点痕が認められる。また、縁辺部の一部に、磨石として使用したと思われる痕跡が、幅1.8cm、長さ約4cmにわたって認められる。

#### 4. まとめ

今回の調査は、角田遺跡としては2回目の調査であるが、正式な発掘調査としては初めての調査である。その点では、トレンチ2本のみの調査ではあったが、角田遺跡の性格を知る上で大きな成果があったといえる。

調査の結果、昭和45年の調査でみられた古墳時代の遺構はみられず、奈良時代以降の遺構であったことや、僅かではあったが弥生土器や凹石が確認できたことは、角田遺跡の複合性を示すものとして新たな知見といえる。

また、これまで上坑が僅かに知られるだけであったが、今回の発掘によって、溝状遺構のほか、井戸などの遺構が存在することが判明した。特に、B区において奈良時代の明瞭な遺構があったことは、南に隣接する宮松遺跡との関連を考える上で貴重な知見といえる。

さらに、A区における古瓦の発見は、僅かとはいえ、古文献に記載されない寺院が存在した可能性も窺わせるものとして、今後注目していく必要があろう。

# 図 版



角田遺跡近景（北から）



A区 SK01



A区 古瓦出土状況

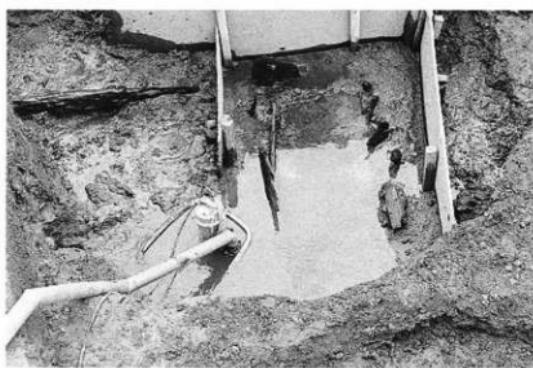
図版 2



B区 発掘調査状況



B区 SD 05



B区 SK 01 (井戸)

図版3



5-1



5-4



5-2



5-3



7-1



7-2



5-5



8-1



8-3



8-2



8-4



8-7



8-6



9-1



8-8



8-9



9-2

図版 4



9-3



9-4



9-6



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-6



13-1



13-2



13-4



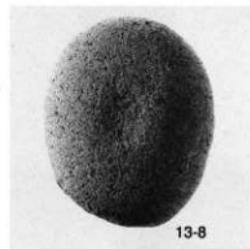
13-5



13-6



13-7



13-8



13-3

平成10年(1998)3月20日 印刷  
平成10年(1998)3月30日 発行

**出雲市埋蔵文化財調査報告書**  
**第8集**

発行 出雲市教育委員会  
印刷 (株)ナガサコ印刷

